

共に生きる WITH LIFE

2019
ウィズライフ
第50号

テーマ

ノーマライゼーションの普及を支える力



私たちの「願い」

私たちは、公益に資する法人として、

- 「高齢者も障がいのある人も社会で共に暮らし、共に生きることがノーマルである」というノーマライゼーションの理念に基づき、
- 高齢者や障がい者が安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備・向上を通して、
- すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与することを目的に取り組んでおります。

私たちのこの「願い」のため

尚一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう

心からお願い申し上げます。

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

理事長 土屋 公三

WITH LIFE 第50号 目次

特集 ノーマライゼーションの普及を支える力

4 共にいきいき暮らすために 街・家・心のバリアをなくそう

おおいし建築士事務所代表 大石 茂晴さん
有限会社環工房代表取締役 牧野 准子さん

10 ノーマライゼーションの担い手 ——チーム紅蓮(旭川)

12 SINCE1989 熱い思いを未来へ ——公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

14 明るいフクシ探検記 伊藤千織 社会福祉法人HOP(エイチオービー)

16 生きがい空間 探訪 札幌市 ショールーム「らく介/RAKUKAI」

18 本誌取材をとおして学んだこと考えたこと 大藤紀美枝

19 「ノーマライゼーション住宅財団」活動紹介

2019年11月1日発行

発行人/土屋公三

発行所/公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団©

〒060-0042 札幌市中央区大通西16丁目2-3ルーブル16 9F

TEL 011-613-7551 FAX 011-612-8431

URL <http://normalize.or.jp/>

【制作スタッフ】 ●編集協力/株式会社日本商工振興会

●編集総括/奥野 彰

●取材・文/大藤紀美枝

●写真/酒井伸一

●レイアウト/高部友恵

●表紙イラスト/佐藤正人

●題字/須田照生

【印刷】株式会社須田製版

我らサポーター ⑥

伊藤

小一さん (80)

株式会社日本商工振興会代表取締役会長
守成クラブ創設及び「商工につぼん」グループ創業会長



日本商工振興会の会長室は、経営船団の操舵室のよう。出版、講演で中小企業経営者にエールを送る

「働きながら夜学に通い、
青年期に5千冊を読破しました」

そう言い切る伊藤小一さん。

20歳の時に27歳で独立創業しようと思われ、
有言実行で出版社を立ち上げた。

札幌に本社を置く全国展開企業の
先駆けとなったその大胆発想の源は、
粒粒辛苦から得た、知恵と勇気。

「ゆっくり歩けば遠くまで行ける」

50代に徒歩で7400^{キロ}、8カ月半かけて

日本一周を成し遂げた際の言葉にも人生観が光る。

本財団理事を創設時から務め、

本誌「ウイズライフ」の編集体制を支えてきた。

30年をひと区切りとして、2019年に理事を勇退。

「一歩引いたところから

財団のあるべき姿を考え続けた」と

愛読書『徳川家康』を範にお目付け役を買う。

メイン写真／酒井伸一
取材・文／大藤紀美枝



2019年2月の伊藤さんのつづやきが、「第1回藻岩山に登ろう」に結実

対談

共にいきいき暮らすために 街・家・心のバリアをなくそう



牧野宅のギャラリーのようなリビングで語らう牧野准子さん（左）と大石茂晴さん（右）

おおいし建築士事務所代表
おおいし行政書士事務所代表
おおいし
大石 茂晴さん

有限会社環工房代表取締役
公益財団法人ノーマライゼーション住宅財団理事
まきの
牧野 准子さん

高齢者や障がい者の自立支援とバリアフリー環境実現のために公私にわたって活動を続ける大石茂晴さん。車いすユーザーの建築士として各所に向き福祉の環境づくりを提案する牧野准子さん。バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化を図りノーマライゼーションの普及に尽力するお二人に、今日の課題とそれを解消するために求められる取り組みについて語らっていただきました。取材・文／大藤紀美枝

バリアフリー化は バリアを知ることから

——牧野さんは、こちら（自宅マンション）を2016年にリフォームされ、ノーマライゼーション住宅財団の福祉住宅建築助成に応募したことで、財団とのつながりができたそうですね。

牧野 はい。審査で私どものバリアフリーリフォームを高

評価していただき、仕事の面でも私的な面でも励みになりました。2005年に進行性の脊髄の難病を発症し、両足にまひが生じたため、住まいをリフォームしましたが、年月を経て身体状況も家族構成も変わり、夫と支え合って今後も自立生活ができるよう、3年前に2度目のリフォームを行った次第です。

大石 玄関から廊下、そして

おいしい建築士事務所& おいしい行政書士事務所

高齢者や障がい者の住まい探し・見守り支援・遺言書作成・任意後見等に対応。

札幌市北区あいの里3条6丁目6-8

TEL&FAX:011-778-6067

E-mail:tomason.sos@yahoo.co.jp

ユニバーサルデザイン 有限会社環工房^{かん}

障がい当事者として講演、建物のバリアフリーチェック、ユニバーサルツーリズムについての講演・コンサルタント、建築デザインおよびインテリアコーディネイト、ノーマライゼーション理念のまちづくりに関する提言等に対応。

札幌市西区二十四軒4条3丁目1-12-603

TEL&FAX:011-664-0334

E-mail:kan_jn@yahoo.co.jp

URL:http://kankoubou.jimdo.com



リビングを拝見しましたが、手すりも家具の配置もよく考えられていますね。
牧野 バリアフリー化をけん引してこられた大石さんに、そう言っていただけるとうれしそうです。私は車いすユーザーですが、家の中では手すりや家具を利用してかろうじて伝い歩きができます。この大きなテーブルは、和室にあった座卓をリノベーションしたものです。部屋の中央に置くことで、テーブルの端を伝ってあちこち移動でき便利です。

大石 なるほど。しっかりした造りで、これなら安心ですね。
牧野 このたび、大石さんの『トマンソンの弟』を拝読し、発行年が私が難病を発症した年なので驚きました。街中や公共施設等のさまざまなバリアを取り上げ、ユーモアを交え警鐘を鳴らしておられますが、状況は当時と変わっていないのではないのでしょうか。
大石 うーん。確かに相変わらずのところもありますが、変わったところもいっぱいあります。発行時、札幌市内の問題箇所がものすごい勢いで改善されたんです。でも影響力が2、3年で衰えてしまいました。残念です(苦笑)。
公共空間は、誰でも年中、気軽に利用できる場所が多くなってはなりません。だから、もう少し真面目に造っていないと、出かけようという気が起きないと思います。
牧野 そのとおりです。歩道に関して言えば、車いすです外に出るとき、歩道に乗り上げて駐車している車があると車道に出なければ通行できません。また、歩道の水勾配は、排水上必要ですが、その勾配のため、車いすの車輪が車道の方にとられてしまいます。

誰かに便利でも、そこに不便や危険を感じている人がいることを知ってもらいたいと思います。
大石 そのためには、夏休み期間に、子どもたちと街のバリアフリー状況を見て歩くといった取り組みを、行政も市民もどんだんやっていく必要がありますね。
牧野 子どもも大人も車いすです外に出る街歩きを体験していただきたいです。気がつくことがたくさんあると思います。私は企業の社員研修の講師も務めています。そこで車いすに乗ってスロープを上る体験をしたらうと「勾配がいかにかバリアになっているか、初めてわかった」とおっしゃる方が多いです。
大石 実際に体験すると、理解度がぐっと深まりますね。
福祉と建築の専門家の連携を強めるために
——最近、特に気になることとして、どんなバリアがありますか。
牧野 私は手だけで運転できる車でどこにでも出かけますが、スローパーなどの駐車場の車いす用の駐車スペースが空



大石 茂晴(おおいし・しげはる)

北海道職員時代、建設関係、地域福祉関係等を担当。在職中に「トマソンの弟」を著わすなどして、バリアフリー、ユニバーサルデザインを推進するために活発に活動。退職後、建築士事務所、行政書士事務所を開き、認知症の家族との暮らしや高齢者等の住宅改善の方法について講演活動を行っている。一級建築士、行政書士。63歳

あらゆるバリアをなくすのは心の連携！ 気持ちを通じたときの喜びは格別です。

いていないときは、買い物をあきらめて帰ってくる場合があります。

大石 切ないですね。実は私、以前は車いす用駐車スペースを、単に車の枠と捉えていました。でも、そうじゃないんですよね。車いすを出し入れするから、車のドアを完全に開けることができるスペースを設けなければならぬ。そのため駐車を大きくして

いるんですよ。

牧野 そういうことを、小学校の福祉の授業に招かれた際に話すと、「なぜ、大きな枠なのかわかったので、お父さんやお母さんがそこに車を止めようとしたら僕が注意します」といった感想文をいただきます。

ハード面を整備しても使用方を間違えたらバリアは解消されません。ですから「知る

こと」が大切ですし、学ぶ機会が必要です。

——大石さんは道職員時代から、異業種の学びの場、出会いの場を設けてこられましたね。
大石 「トマソンの弟」を出版するきっかけは、建築技術職でありながら保健福祉部地域福祉課に異動になり、福祉のための住環境を整える仕事を任されたことにあります。

まずは街を知ろうとカメラを持ち歩き、おかしいと思うものを絵日記のように写していききました。それが私の一つの学びの場になりました。

牧野 福祉と建築って、まだ線引きされているところがあって、それぞれの専門家があってもご存じないことが多いように思います。

大石 そう、問題はそこなんです。で、先の部署では、障がい当事者、理学療法士、作業療法士、認知症の人の家族の会など、さまざまな人が加してもらい、建築屋さんが増える冬場に介護リフォー



『トマソンの弟』

大石茂晴さんが「HAL. おおいし」の筆名で出版。「トマソン」とは、故赤瀬川原平氏が提唱した超芸術で、不動産に付着して美しく保存されている無用の長物を指す。福祉環境整備に取り組む大石さんが、存在理由が不明の点字ブロックなど、福祉環境整備におけるトマソン的な事例を取り上げて考察した注目の書。2005年発行。現在、インターネット等で購入可。

ム講座を開きました。トータルで1千人ぐらいの建築屋さんが参加してくれました。

牧野 まあ、そうですね。

大石 建築屋さんに車いすに乗ってもらい、街にラーメンを食べに出かけたこともあります。先ほどの牧野さんのお話にあったように、「車いすで移動することが、こんなに難しいとは知らなかった」と言っていました。また、介護リフォーム講座を受講して、「よりよい住環境整備を進めるためにも、専門性を高める力になっていきたい」と話の方がたくさんいました。



牧野 准子 (まきの・じゅんこ)

建築士、インテリアコーディネーターとして活躍。難病のため2005年から車いすユーザーに。独自の目線でまちづくりや福祉住環境のデザイン・調査・提言、心のバリアフリーやユニバーサルマナーを伝える講演を行っている。「北海道男女参画チャレンジ賞」の輝く女性のチャレンジ賞受賞。2019年から当財団理事。61歳。

住環境改善で 自信を取り戻し外へ

——ハード面だけでなく、心のバリアも解消したいですね。
牧野 車いすで移動している
と、ジロジロ見る人がいます
し、まったく無関心な人もい
ます。また、怖そうに見える
人がパツとドアを開けてくれ
ることがあり、優しい人が意
外に多いというのが正直な感

想です。

大石 私は、世の中、随分冷
たくなったと思うことがあり
ます。困っているとわかって
も手を貸さない。見て見ぬふ
りをする。そんな人が増えて
いませんか？
牧野 障がいのある人や困っ
ている人に気づいても、どう
声をかけてよいかかわからず、
その結果スルーしてしまう人
も結構いると思いますよ。

大石 確かにそうかもしれま
せん。しかし、こうも言える
んじゃないでしょうか。人間、
余裕がなければ手助けをする
側に回れない。去年の北海道
胆振東部地震とそれに伴うプ
ラックアウトでもそれを感じ
ました。

10年前は、今ほどバリアフ
リーは進んでいなかったけれ
ど、人間は今よりも心にゆと
りがあったように思います。

障がいのある方も街に出ましよう！ 自信が湧き、新しい世界が開けます。

——そうした中で、どのよう
な取り組みが求められますか。
大石 障がいがあるうがなか
ろうが、他者に少しでも関
わっていくことが必要です。
そうしなければ、ますます生
きづらい社会になってしま
います。

障がいのある人が外に出て
行くには、公共空間のバリア
フリー化を進めなければなり
ませんが、もっと大事なのは
自宅です。家具の位置を変え
るだけでもできることが増
え、手すり一本で、えらく様
子が変わります。

牧野 私も先を見据えて住環
境を整えることで、トイレに
一人で行けるようになり、で
きなかつた家事ができるよう
になりました。これって、人
としての尊厳・自立の大きな
要素で、自信につながります。
大石 福祉住環境に詳しくな
くても、精通した人を知るこ
とで、身の回りが改善されま
す。できることが増え自信を
取り戻したら、積極的に外に
出て行ってほしいですね。障
がいのある人が周りにたくさ
んいれば、珍しくなくなり、
ジロジロ見る人もいなくなり
ますよ。
牧野 そうですね。私のこれ

までの人生で、一番つらかつ
たのは、難病を発症してでき
ないことが増え、人にお世話
してもらわなくてはならなくな
ったことです。自信を失い、
ひどく落ち込みました。高齢
の方や脳梗塞などの後遺症で
体にまひが残った方も同じ思
いをしていらつしやると思
います。そうした方々にこそ、
住環境を整えていただきたい
です。できることが増えると、
生きる希望が見つかります。

一歩踏み出してこそ 分かり合える

——大石さんも牧野さんも人
の輪を広げる達人ですが、そ
の秘けつは。

大石 即行動し、いろんな人
を巻き込んでいくことですね。
例えば、先ほどお話しした介
護リフォーム講座には、人工
呼吸器が必要な重度の障がい
をもったHさんにも参加して
いただきました。あるとき、
北見から「勉強したい」との
声が上がったので、Hさんを
介護タクシーに乗せて送り込
みました。

そういうことを繰り返す中
で、Hさんの慰労会というこ
とで、みんな酒を飲み

行ったんです。ビルの地下にあるお店まで、本人と電動車いす合わせて200^キもあるHさんを8人がかりで担いで降ろしました。すごく重かったけれど(笑)、お店のお客さんも巻き込んでとても楽しかったです。

牧野 私も似たような経験があります。東京の知人が来札し数人集まったとき、「すすきの有名なジンギスカン屋さんに行きたい」と言う人がいたので久しぶりに行ったら、お客さんが列を成していました。混み合っている中へ車いすの私も含め入って行くこと「あんたらえらい！ 車いすでよく来た」と一人のお客さんがほめてくださったんです。

大石 うれしかったです。「ああ、この人わかってくれてる」と思うと、心が躍りますよね。

牧野 障がいをもつと、体が不自由なだけでなく、心もダメージを受けていますから、外に出るって勇気がいるんです。誰かに親切にしていただと、「ああ、来てよかった」と思いますし、じゃま者扱いされると「来なければよかった」と思ってしまう。

大石 障がいのある方が外に出るのに勇気があるのは、よくわかります。今年7月の参議院選挙で重度障がいのある方が当選し、国会議員になりましたよね。お二人が国会にいるだけで、多くの人の意識が変わり、世の中も変わっていくんじゃないかと期待しています。

お手伝いしましょうか その一言が励ましに

——牧野さんはユニバーサルマナー（高齢者や障がい者への適切なサポートやコミュニケーションシヨン方法）にも精通されていますが、日常生活では、どのようなことに留意すればよいですか。

牧野 トイレの話をしますと、世の中には、さまざまな理由で多目的トイレでなければ不都合な人がいます。ショッピングモールや量販店などにお勤めの方は、多目的トイレの場所を尋ねられたとき即答できるように心にかけていた方がいいです。

ホテルなど宿泊施設においては、段差をなくするなどバリアフリーを徹底してほしいです。バリアフリー調査で訪れ

たあるホテルでバリアを指摘したところ、「うちには障がいのある方がお見えになりませんから」と言われました。「来ない」のではなく、「バリアがあつて利用できない」ことに気づいて、速やかに改善していただければと思います。

大石 マナーに関して言えば、日本は海外と比較していいかがですか。

牧野 やはり欧米はマナーが根付いていると思います。円山動物園での話ですが、私が車いすでモンキーセンターに入ろうとしたとき、飛んできてドアを開け、「プリーズ」と言つて私が入るまでドアを押さえていてくれたのは外国人のお子さんでした。

大石 雪道で車いすが埋まったときなどは、どうですか。

牧野 通学途中の小学生が、雪道からの脱出に手を貸してくれたこともあります。特に相手がお子さんの場合、「お手伝いしましょうか」と声をかけてくださったら、大丈夫な状況でも断らないようにしています。断られた経験が親切な行動を抑制してしまったら、それはとても残念なことですから。

大石 なるほど。そうした配

15年ほど前のバリア事例

バリアが解消したものもあれば、当時のまま残存するものも(大石茂晴さん撮影)



「ウソのようなホント」
つまずいたら痛そうな段差。1段上った先がなんとスロープに。



「消化不良」
施設玄関まで点々と敷設された線状誘導ブロック。連続していなければ意味がない。



「ちょっと悲しい存在」
手すりにつかまろうとしてミステリーに気づく。この場合、L形手すりは「J」の向きが正解。



「そんな、ご無体な」
線状誘導ブロックが指し示す方向に進行すると、横断歩道から外れてしまう。

お手軽リノベーションの一例

牧野宅の玄関。ベンチ収納の天板の廃材を再移用して簡易スロープに。自身の外出時はもちろん、車いすユーザーの来客にも便利。(牧野准子さん撮影)。



慮が回り回って、いつか自分に戻ってきますよね。
牧野 家の中にも、街中にも、障がい者になって初めて気づいたことがあります。それを各

所でさまざまな人に伝えるのは、障がい者の私だからできることだと思いい、バリアフリー調査や講演の依頼、取材も時間が許す限り受けています。

—— 今後の抱負をお聞かせください。
大石 私自身、60歳を超えて思うのは、認知機能が衰える前に、自分の居場所を用意しておかなければということですね。年を取って孤独な環境に身を置くことになるかもしれない。そういう人たちが一つ屋根の下に集い、自分ができることをしながら、緩い関わりの中で同居していく「グループリビング感覚」の住まい方を、北海道で提供していきたいと考えています。
牧野 ということは、まだまだご多忙な日が続きますね。車いすユーザーが外に出て活動する際、トイレのバリアフリーは重要課題ですから、私は不慣れたトイレの写真を撮りだめて、機会あるごとにその不便さを訴えています。
大石 そのトイレ研究会に、私も入ります。
牧野 ありがとうございます。本日はいろいろお話ができ、よかったです。今後ともよろしく願っています。
 (2019年8月14日 牧野宅にて)

笑顔を生む、うれしい配慮

街中で、観光地で、キラリと光るおもてなし(牧野准子さん撮影およびCホテル画像提供)



「入りたくなるお店」

入り口までスムーズに誘導する点字ブロック、タッチ式自動ドア、ガラス張りで店内が外から見えることにも安心感がある。



「泊まりたくなるホテル」

客室：ベッドルームからトイレ・浴室までの動線に配慮し、壁に照明付きのカウンターを設置。歩行に不安のある人も手でカウンターを伝って移動できる。館内ショップ：会計カウンターの高さに配慮。小柄な人や車いすユーザーも使いやすい。

障がい当事者のリードで連携して働き誰にも優しいまちづくりに貢献

ノーマライゼーションの担い手

● チーム紅蓮(旭川)

旭川近郊1市8町のバリアおよびバリアフリー情報をはじめ、障がい当事者が参画したイベント情報を全国に発信する「車いす紅蓮隊」。13年目を迎える自立就労支援事業(チーム紅蓮)に焦点を当て、「ノーマライゼーションの担い手」と呼ぶにふさわしい取り組みを紹介します。

取材・文/大藤紀美枝

仕事に就きたい思いを自分の言葉で訴える

「障がい者が街に出なければ、周りも接し方がわからないし、何をどうしてよいのかわからない。車いすで街に出て、愚連隊のように自由に振る舞ってこい」との思いを込めて名づけられた車いす紅蓮隊。

カムイ大雪バリアフリー研究所会長・理事の只石幸夫さん(66)は、車いす紅蓮隊およびチーム紅蓮設立の立役者で、木製品製造販売会社等を経営すると同時に、観光やパラスポーツ関連の公職にも就

き、二十数年にわたり障がい者福祉に尽力してきました。

チーム紅蓮の施設長を務める五十嵐真幸さん(33)は、只石さんらとの出会いをこう語ります。

「高校を卒業後、事務職を希望して就職活動しましたが、車いすユーザーということで、僕も友人もことごとく不採用となりました。できないこともあるけれど、できることもある。話だけでも聞いてほしいとの思いをパラスポーツを広めてきた永瀬充さんに話したら、社長さんたちが集まる席に僕らを加えてくれたんです」

五十嵐さんら二十歳前の若者の地域デビューの場となったのが、2006年の冬季パラスレック・トリノ大会へアイとして出場が決まった永瀬さんを支援する人たちの集い。

「仕事をしたくても採用されない。みんなと同じように暮らしたい」と訴える五十嵐さんらの声が、只石さんら地域福祉や障がい者福祉を自分のこととして捉える人たちの心に響いたの言うまでもありません。

「異業種交流で知り合った連中が、バリアフリーとか、ユニバーサルデザインとか、ノーマライゼーションとか、よくわからないながら勉強会を開いていたんです。障がい当事者と一緒に酒を飲みながら語らうようなことを頻繁にやっていて、その輪の中に彼らを引き込みました」と只石さん。



チーム紅蓮の事業所で歩みと抱負を語る只石幸夫さん(左)と五十嵐真幸さん(右)

「僕らにしてみれば、お父さん、お母さんみたいな人たちと話す感覚で、物おじすることはありませんでした。今考えると冷や汗ものですが」と五十嵐さんは苦笑しつつ当時を振り返ります。

採用を待つのではなく働く場を作り出す

就職できないことに悩む五十嵐さんらに只石さんらは、

「受け入れてくれるところがないのなら、働くところを君たちで作れ」と提言。

2006年、障がい当事者を中心に車いす紅蓮隊を結成した五十嵐さんらは、障がいのある人の旅をサポートするバリアフリーツアー情報の集積・発信を行う一方、障がいのある人もない人も一緒に楽しめるイベントを企画・運営することで、地域とのつながりを強めていきました。

仕事を生み出す経験の一つが、自信につながっていったのは明らかで、2012年、障がい当事者7人が運営する就労継続支援施設・チーム紅蓮

蓮開設にこぎつけました。チーム紅蓮の現在の利用者は、歩行障がい、聴覚障がい、視覚障がい、知的障がいのいる人など約20人。それぞれの



Tシャツなどのデザイン&プリント(左)、オリジナルデザインのクラフト(中央)、ハーブの栽培&商品化(右)…。得意分野で腕をふるう



就労継続支援施設
【A型・B型】
チーム紅蓮

旭川市東旭川町旭正315-2
TEL:0166-38-8200 FAX:0166-38-8211
E-mail:info@dpcmaika-hokkaido.com

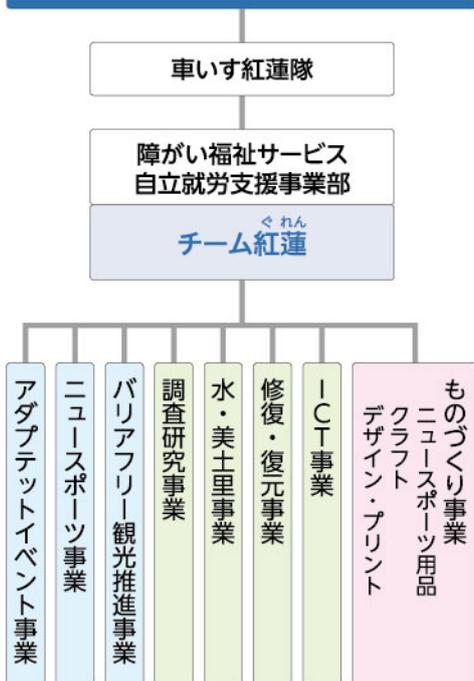


チーム紅蓮のメンバーが家族で参加したバリアフリーキャンプ

特定非営利活動法人 カムイ大雪バリアフリー研究所

車いす紅蓮隊、旭川医科大学をはじめとする地域の大学関係者、病院、介護施設、福祉用具制作、旅行、ホテル、料飲食企業、障がい者スポーツ支援会、観光協会、市民団体等で構成。2006年に設立し11年に法人化。車いす紅蓮隊が柱となって、障がいの有無や年代、性別、国籍に関係ない地域共生の環境づくりを進めている。

カムイ大雪バリアフリー研究所



状況に合わせ、A型(雇用契約を結び給料を受け取りながら利用)、あるいはB型(授産的な活動を行いながら利用)を選択しています。チーム紅蓮の事業は、左図に示すとおり多岐にわたたり、障がい者スポーツの普及・合宿サポートや、ものづくりをとおして地域と連携し、緻密にして大胆に展開。事業所1階ではデザインおよびプリントを行う作業、イラストを描く作業、データ入力やホームページ制作などICT事業関連の作業、裏の畑で育てたハーブの選別作業などが行われており、印刷機が休みなく動く音がBGMになっています。

オリジナリティを磨き 唯一無二のブランドに

「シャツプリント、刺しゅう、缶バッジ、ステッカーなど1枚、1個から制作可能ですから、お気軽にご利用ください」と語る五十嵐さんは、デザイナーとしてセンスを、施設長としてリーダーシップを発揮。「メンバーが増え、イベントも増え、忙しいのはうれしいこと。ディレクションできる人を育てなければ」と、自身に新たなテーマを課しています。「仕事の上でも、遊びの中でも、独自の発想で取り組むと、それがブランドになっていきます。チーム紅蓮は、だいたい、いいところまでできています。一緒にやろうという人々を

引き込むことが大切で、それが力になっていきます」と語る只石さんですが、実はこの日、若干疲れ気味。理由は週末に行われたチーム紅蓮主催のバリアフリーキャンプ。各々家族で参加し、約60人が雨の中、焼肉を食べ夜のハイキングを楽しんだそう。「夜のハイキングは、暗がりでの車いすユーザーの避難訓練を兼ねたものです。子どもにおいては家族以外の人の手助けを経験する機会にもなりました。顔見知りでない人とも一緒に何かやる。地域の人とつながることが、自分たちが暮らしやすいまちづくりにつながります」と只石さんと五十嵐さんは口をそろえます。

共に暮らし、共に生きるために 住生活環境の整備・向上に努める

SINCE 1989 熱い思いを未来へ

●公益財団法人ノーマライゼーション住宅財団

「ノーマライゼーション」を世に広め、誰もが平等に住むにふさわしい、よりよい住環境を北の風土に築きたい——。熱い思いを束ね財団を設立して30年。あゆみを振り返り、取り組みの成果をお伝えします。

取材・文／大藤紀美枝

ノーマルを標榜し 財団を設立

「すべての人が共に暮らし、共に生きることがノーマル（正常）」というノーマライゼーションの理念は、北欧に端を発し、国際障害者年（1981年）を機に我が国においても広まりました。

1989（平成元）年、財団設立の経緯を土屋公三理事長（78）は、こう語ります。

「私どもの長女・房子は、脳性まひのため重度の障がいがあります。妻と共に、身体障がいや知的障がいがあっても



土屋公三理事長

「助成金による福祉住宅建築支援」

安全・快適に生活できる住宅を

を考え続け、房子のためにも障がいのある多くの人のためにも、ノーマライゼーションが浸透してほしいとの思いから財団設立の意を固めました」趣旨に賛同した建築・福祉・

助成金による 福祉住宅建築支援

芸術分野の教育・研究者および、建築家、経営者らが理事、評議員に名を連ね、財団法人土屋ノーマライゼーション住宅財団を設立。1993年に改称し事業を広範に展開していく中で、公益に徹するため2012年公益財団法人となり、今日に至ります。

本財団は住生活環境を中心に、高齢者や障がい者を取り巻く問題を分析し、課題を解決していくための道を

探るため、行政、民間企業、研究機関と連携し、具体的な事業を展開していきました。

「助成金による福祉住宅建築支援」

年譜

1989	財団法人土屋ノーマライゼーション住宅財団設立、助成金による福祉住宅建築支援事業開始
1991	北欧ノーマライゼーション住宅研修実施（以後、国内外で視察研修を実施） 福祉住宅建築助成実例集『生きがいの家づくりのために』創刊（1995年、『ふれあい』に改題）
1993	財団法人ノーマライゼーション住宅財団に改称
1994	広報誌『WITH LIFE（ウィズライフ）～共に生きる～』創刊
1996	「おとしよりが楽しく暮らすためのアイデア・コンテスト」創設（第18回から、小中学生による「安全・快適アイデア」コンテストに改称）
2012	公益財団法人として新たにスタート
2019	本財団設立30周年、『WITH LIFE』50号発行



家庭菜園で高齢期の生きがいに
いて語る菊地弘明さん

当初から2018年度まで本事業の審査委員長を務めた菊地弘明（87）は、事業の趣旨とこれからの福祉住宅に求められるものを次のように語ります。

「障がいも取り巻く環境も一人一人異なります。だからこそ知恵を絞って障がいを乗り越えている人・家族のノウハウ



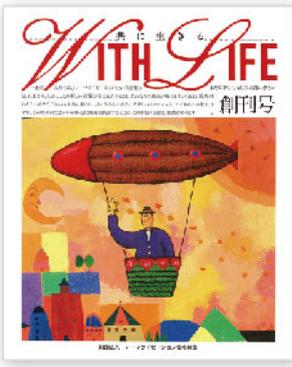
福祉住宅建築助成実例集「ふれあい」

ウを共通財産にして、次代につなげていく必要があります。住む人の変化に家を対応させていく柔軟性こそが、今日の福祉住宅づくりのキーポイント。財団発行の実例集『ふれあい』を役立てていただきたいと思えます」

インターネットの普及も手伝って、近年、本事業には全国から応募があり、安全・安心、そして快適な福祉住宅づくりの輪が大きく広がっています。

誌名に思いを込め 役立つ情報を発信

今や「共生」が時代のトレンドとなつていますが、1994年創刊の広報誌の名が、『WITH LIFE』共に生きる』。本財団設立時から理事を務め、広報誌創刊・編集に尽力した故伊藤隆一・北海



『WITH LIFE』(ウィズライフ) 共に生きる』創刊号

山口幸子さん(健康クラブ 事務局 長)と対談する忍博次さん(左)



道教育大学名誉教授らの思慮とセンスに驚くばかりです。

本誌の近年の特集テーマは、「少子世代の親介護」「尊厳が守られる暮らし」「地域での支え合い」「目の不自由な人へのサポート」「ボランティア」など。

通巻49号中、対談、寄稿などで最も多く登場した忍博次・北星学園大学名誉教授(89)は、「事実を科学的に説明するのが学者の役目。地域に出て行くことが大事。そして一緒に考えること」を全国各所で実践してきた人。

「福祉は、みんなが理解しなければならぬことだから、難しい話をしてもしようがない」と提言し、「でも、理論的

な道しるべは重要」と研究成果を発信し続けます。

よいアイディアを生む 子どもたちの優しさ

すでに23回を数える「小中学生による安全・快適アイディアコンテスト」は、1996年秋、『WITH LIFE』創刊3周年記念事業として行われた「おとしよりが楽しく暮らすためのアイディア・コンテスト」が発端。以来、全道の小中学生を対象に、年1回実施しています。

通算23回の応募総数は1万2499作品を数え、近年は本州からの応募も。故伊藤隆一氏の後を受け、第5回から審査委員長を務める大阪克彦・



審査委員長として「公正さ」を重視する大阪克彦さん

北海道デザイン協議会名誉会長(77)が、回によって1千点を超える応募作品を1点1点じっくり読み込んでノミネート作品を絞り込んでいきます。

「交通事故、健康、防災、超高齢社会など、世の中で問題となっていることに関心を持ち、その対策を考え、作品としてまとめ上げるみなさんに敬意を表したいです。アイディアはもちろん、イラストや説明文も巧みで、実用化が望まれる作品が数々あります」と言葉を弾ませる大阪審査委員長。

各界から「誰かのために知恵を絞ることの意義は計り知れない」「このコンテスト自体がすばらしいアイディア」といった声が上がリ、本事業への期待の大きさが伺われます。

福祉先進地を視察 レポートを冊子に

福祉や住生活環境に関する生きた情報を収集して提供するため、本財団では参加者を募って国内外の福祉施設等の視察を行っています。

1991年の北欧視察から参加している酒井進さん(89)は、養護学校などで障がい児教育に励んできた人。1998年の

「北欧ノーマライゼーション住宅研修(1991年)」のひとコマ。前列左・土屋公三理事長、後列右・酒井進さん



中欧視察に際し、かねてより関心を持っていた集団指導療育「ペトウ法」に触れるべく、ハンガリーのペトウ・アンドラーズ研究所見学を提案するなど、熱心さは群を抜いています。

「アメリカ西海岸視察では、高齢者や障がい者こそ利便性のよいところにとの考え方に感銘を受けました」と酒井さん。本財団の視察参加者には、レポートが課せられており、それをまとめた「報告書」を発行しているのも、社会貢献を旨とする本財団ならではの言えるでしょう。

※事業の詳細は本号19ページ参照。

自分らしく
働く

障がい者支援施設 「あっぷ」
SINCE 2008

仲間が増えた!



70キ種の
餅屋を成功
作業中



★災害備蓄用
パン・ビスケット製造
販売

★代表で理事長の
竹田保さん。
ご自身も筋ジストロ
フィーで車イスの生活。
その信念と行動力は
すごい!!

竹田さんが
シブくなった!
マネーシメントと
マッチングがカギ
スーツ姿は
変わらず

「ベーカリー
& ケーキング」

おいさと安全。
食を仕事に!

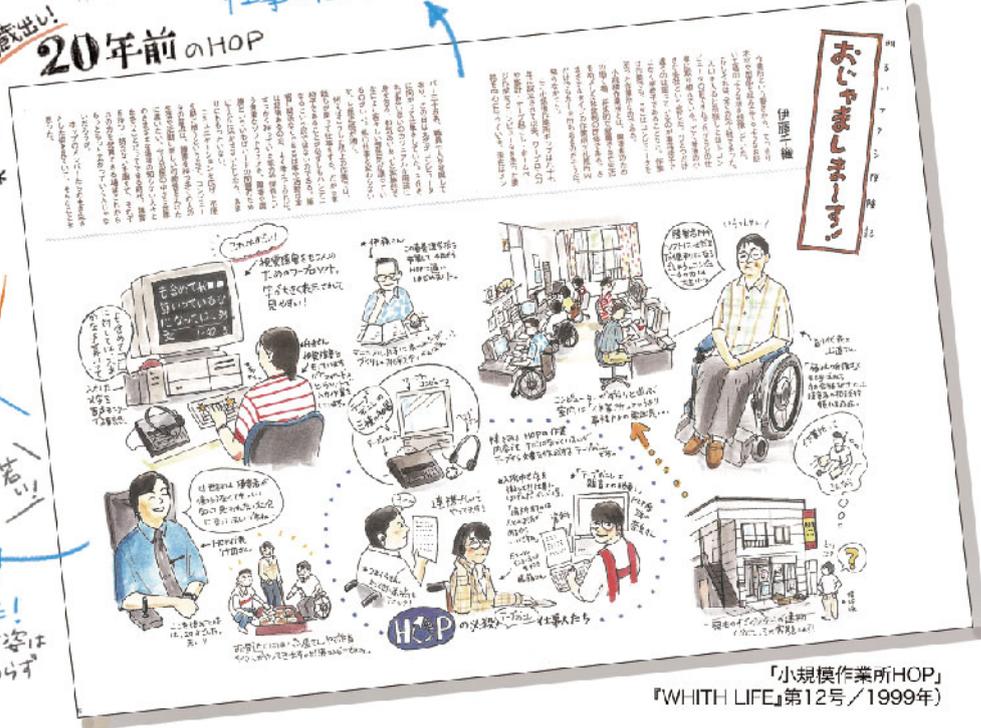


仕事の種類と幅が広がった!



★施設長の齊藤さん
DPIをきっかけに福祉へ。
「収入が上がるように
しておきたい!」

歳出し!
20年前のHOP



「小規模作業所HOP」
『WITH LIFE』第12号/1999年

明るいフクシ
探検記

おじゃま
します!

文・イラスト
伊藤千織



「社会福祉法人
HOP」

エイチ
オー
ピー

福祉をめぐる20年

今年の本財団設立30周年、本誌50号、そして「素人目線による福祉の現場探検記」として1999年にスタートしたこの連載も20年目の節目を迎えた。

これまで訪れた取材先の中でとりわけ印象深いのは、初回にお邪魔した「小規模作業所HOP」だ。当時から同所は、データ入力やテープおこしなど、新しいIT技術をいち早く活用し、障がいのある人たちの新しい働き方を予感させてくれた。時を経た今、彼らはどうしているのか、会ってみたくて出かけてみた。

狭く深くから、広く浅くへ

HOPは現在も社会福祉法人として、障がいのある人の社会参加や自立を支援する団体として幅広く活発に活動していた。

当初高い就労能力を持った少数の専門集団から始まった事業は、個々の能力や体力・適性に差がある福祉の世界で、常に時々課題や出会い・

社会福祉法人 *こころに広がった!*
HOPの30年
エイチ・オー・エフ

1987年に11人の作業所から始まったHOP。
 今では全8事業所で、1日300人のよりびこりに。
 初取材から20年、現在のHOPを探検します!

地域や会社で暮らす...
 住まいや暮らしの支援が増えた!

多機能型事業所
「エンデバー」 SINCE 2009

生活介護・デイサービス・共同住居・児童デイ・
 就労の複合施設。医療ケアも可。
 ワンストップだから安心!

生活介護 & デイサービス
 10:00~16:00



★施設長・中村さんは
 もともと看護師さん
 「これがらほもと医療との連携が大切」



2F「共同住居」16室



スタッフは39名

ワンルーム仕様でそれぞれ自分に合った住み方としています。

内職系のおじと
「軽作業」
 ていねいキレイな仕上り!

★年に一度まとめて
 請負うシロッター作業
 ¥50/kg也。



今日はカレンダーの組立て & 包装

検査キットの袋詰め
 ティッシュの袋詰め
 ティッシュの包装 etc...

手ロッター酷い! 手んが 楽そう!

利用者が 増えた!

15:30~17:00
「放課後等デイサービス」



養護学校に通う重度障がい
 BOYS&GIRLS対象の児童デイ。



「障がいのある人の労働は能力の問題でなく

●社会福祉法人HOPホームページ <http://www.hop.or.jp>

要望に応える中で、より広くより多くの人へという方向に変化してきた。現在は、札幌市内に作業所や福祉ホームなど8事業所を運営するまでに発展している。

「流されてここまで来ただけ」と代表の竹田保さんは笑うが、結果的に福祉の「平等性」という広さを選択してきたことに、深さと優しさを感ぜずにいられない。

常識が変われば世界は変わる

この20年を振り返れば、ハード面のバリアフリー化や福祉関係者の働く環境も変化し、社会全体としては確実に向上している。しかし障がい当事者を取り巻く環境はどうだろう。現在も就労B型事業所の平均工賃は月1万6千円程度だ。経済的な基盤を作り、自立して生活できる社会を実現するには、まだ先は長い。

しかし、竹田さんは力強く語る。

「新しい常識が生まれれば、今の普通は普通でなくなる。社会は常識を超えて変わっていく」

自動運転の車で誰もが自由に出かけられ、義足のアスリートが生き生きとジャンプする時代が来ている。20年後のフクシの未来もきっと明るい。

●札幌市
ショールーム
「らく介^{かい}／RAKUKAI」
(土屋ホームトピア・ノーマライゼーション課)

困りごとに着目、解決の道を探り 楽しくラクな介護生活をサポート

取材・文／大藤紀美枝



車いす、介護ベッド、ホームエレベーターなど、優れた福祉用具を展示するショールーム「らく介^{かい}／RAKUKAI」

福祉用具をはじめ 住環境全般に対応

段差をなくしたり手すりを取り付けるなどして、高齢の人や身体の不自由な人も住みやすくすることを、一般に「バリアフリーリフォーム」と言います。バリアフリーリフォームの心構えを土屋ホームトピア・ノーマライゼーション課・課長の池田広行さんに尋ねると――。

「手すりにしろ、スロープにしる、その設置には細心の注意が必要です。手すりは立ち上がりや歩行、姿勢の変換など、いろんな場面で役立ち、ときには命綱にもなるものですから、1本だけ取り付けるにしても、福祉住環境に精通した専門家に相談することをおすすめします。そして種類、材質、強度、サイズなど、よく吟味して、利用される方に

合ったものを設置してください」

同社はノーマライゼーションの理念に基づき、誰もが快適に暮らせる住まいづくりに取り組んでおり、2018年8月、本社（札幌市厚別区）1階に介護保険サービスを利用した福祉用具の貸与・販売および関連商品を展示するショールーム「らく介^{かい}／RAKUKAI」をオープンしました。

「当社はバリアフリー、ユニバーサルデザイン（バリアとなるものがないデザイン）に関するノウハウを蓄積しています。それらをベースにノーマライゼーション課は、介護福祉分野、住宅建築分野、そして総合的な資金計画等も含め、住環境全般にわたるニーズにワンストップで



ノーマライゼーション課のスタッフ。左から北島昌美さん、池田広行さん、内藤伸之さん

でお応えすることをモットーとしています」と池田さん。

同社ノーマライゼーション課のスタッフは、福祉住環境コーディネーター、福祉用具専門相談員、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、介護支援専門員（ケアマネ



左:壁面に手すりが取り付けられない場合は、床から立ち上げ式の手すりに。玄関の仕様に合わせてオーダー可能
右:ソファの立ち上がりをラクに安全にサポートする床置き型手すり

※画像提供:矢崎化工機



狭い間口にも対応できる丈夫で軽量の材質 (FRP+アルミ) のケアスロープ。折り畳んで持ち運び可

※画像提供:ケアメディックス株



エントランスに適切な手すりとスロープがあれば、介助を必要とする人も介助する人も安心

※画像提供:TOTO北海道販売株

ジャー)、ホームヘルパー、ファイナンシャルプランナー等の資格を有し、専門的な知識に基づく的確なアドバイスをを行っています。

実物を見て 使い勝手を試す

要支援あるいは要介護の認定を受け、介護保険サービスを利用するに当たり、最寄りの地域包括支援センターある

いは契約した居宅介護支援事業所のケアマネジャーが相談のつてくれますが、福祉用具選びにも住宅改修にも不安が伴うものです。

「カタログでも詳しく説明していますが、やはりショールームにお越しになって実物を見て、使い勝手を試してみるに限りです」と池田さん。

狭い空間でも360度回転が可能な6輪型車いす、簡単

にオート操作できる多機能介護ベッド、畳んで持ち運べるポータブルスロープなど、福祉用具の性能は日進月歩で向上しています。今、自分が必要としている用具だけでなく、苦痛にならない介護の全体像が実感できるのもショールームならではのと言えるでしょう。

「食事や排せつは特に配慮が必要ですから、介護食や紙おむつの紹介にも力を注いでい

支援制度や資金計画等 お金に関する助言も

福祉用具や住宅改修が必要になったとき、先立つのはやはりお金です。

「お客様のどんな小さな悩みも聞きもらさない」を合い言葉に課題解決の道を探り、日常生活の改善につなげていくよう努めています。

介護保険で要支援、要介護の認定を受けていれば、住宅改修(手すりの取り付けなど特定6項目)を事前申請すると、一人当たり20万円まで支給を受けることができます。また、障害者手帳を持っている人は、等級により日常生活用具給付を受けることができます。「国や自治体による支援制度に加えて、ノーマライゼーション住宅財団が実施している福祉住宅建築主助成金(詳しくは本号19ページ参照)なども利用されるとよいでしょう」と話す池田さんは、「身体状況は変化しますし、住まいの改修や家財の買い替えなども考慮しなければなりません。将来を見据えた資金計画をしっかりと立てる必要があります」とも。「らく介/RAKUKAI」で

は、介護福祉施設などに入ることにしたときに空き家となる自宅についても相談にのり、不動産活用や相続に関する助言も行っていきます。

明るいショールームには、さくら色のおしゃれな歩行器あり、洗練されたデザインの介護ベッドあり。工程がひと目でわかる住宅改修のモデル図は、楽しくラクな介護生活を連想させます。

そして何より喜ばれているのは、親身になって話を聞いてくれるスタッフの笑顔。介護に対する不安や心配を和らげてくれること請け合いです。

ショールーム
「らく介/RAKUKAI」

札幌市厚別区厚別南1丁目18-1
土屋ホームトピア本社ビル1階
TEL:011-896-3310 FAX:011-896-3031
受付時間/9:00~18:00(土・日・祝日を除く。
要問い合わせ) 入館料/無料

話を「聴く」ことで

この人と共に生きていると実感

～本誌取材をとおして学んだこと、そして考えたこと～

大藤紀美枝（本誌メインライター）

ライターとして取材をしてい

ると、「文章が書いていいですね」と声をかけていただくことがあります。ライターに文章力は必要ですが、それ以上に大切なのは、正しく聴き取ろうと努めることだと思います。

私は広告の分野を主なフィールドとするライターで、本誌『WITH LIFE』共（1997年）から制作スタッフに加えていただき、企画および取材をとおして、障がいのある方、病気の方、介護を必要とする方・介護する方、建築、福祉、医療、教育、行政などに携わる方などとの面会を重ねてきました。

1回の取材時間はおおむね90分。ほぼ初対面で、限られた時間内で質問に答えていただき、写真を撮らせていただきます。カメラマンの同行がない場合は、せん越ながら私

が撮影します。

移動したり撮影場所を探したりしながらの取材ですから、話すことに100%集中するのは難しい状況です。そうしたこともあって、録音の了解を得た上でICレコーダーを使用します。

原稿を書くに当たり、録音した音声の「文字起こし」を行います。その作業に相当な時間と集中力を要します。何度も何度も巻き戻して聴き直すのは、言葉はもろろん、声のトーンや間から、その方が何を考え、どんな思いで話しているのか正しく聴き取らなければならぬからです。

「聴く」ことに時間を惜しまず細心の注意を払うようになつたのは、ある反省からです。自宅で取材の録音を再生していたときのことです。脳に障がいのあるお子さんとのコミュニケーションについて親御さん

に質問したところ、親御さんは「この子は話さないから」とおっしゃいました。

私は、その言葉にドキッと思いました。自分は、お子さんが「話せない」と思い込んで、親御さんに質問していなかったか。「話さない」と「話せない」とでは、意味合いがまったく異なります。至らなさを深く反省するとともに、親御さんの深い愛情に感じ入りました。

◆ ◆ ◆

『WITH LIFE』の制作スタッフに加わった当初、障がいのある方に障がいの原因を尋ねたり、進行性の病気の方に進行の度合いを確認するの、かなり勇気がいりました。「こんなことを聞いて、いいものだろうか?」「失礼にならないだろうか?」「イヤなヤツと思われぬだろうか?」。そんなことを考え、胸が苦しくなることはありません。

内心びくびくしながら質問していた私ですが、取材において腹が据わったのは、2000年に自身が乳がんを患い、手術を受けてからです。

「現代の日本の医療の恩恵に預かったから、生きていられるわけで、昔だったら、あるいは医療の手の届かないところにいたら、死んでいた。自分は、たまたまこうして生きている」

そう思ったとき、いい人であらねばならない」という縛りが解け、誤解されることへの恐れが薄らぎました。また、がんの告知を受けたとき、「私も、がんになるんだ」と、すんなり病気を受け入れられたことも幸いでした。

定期的ながん検診で乳がんが疑われ、いくつかの検査を経て、乳がんと診断されたのですが、がんの告知はさすがに重く、病院の帰り道、涙が流れました。でも、「どうして、私が」とは思いませんでした。

「どうして、私が」となれば、そこに葛藤が生じ、気持ちの整理がつくまで立ち止まざるを得なかったと思います。しかし、感覚的に「私も」と捉えた私は、速やかに治療に専念することができました。当時は、「どうして、私が」と「私

も」の違いに気づきませんでした。その後、さまざまに失敗や不測の事態に直面する中で、自分の身に起きたこと、つまり現実を受容することから、課題解決の道が開けることを学習しました。

がん告知を受けた際、無意識のうちに「私も党」になれたのは、取材などで、いろいろな苦しみや悲しみを受容し、ひたむきに生きている方々にお会いし、経験談をたくさん聴くことができたからにはかならないと思います。どんな場合であれ、話を「聞く」で済まさず、「聴く」ことで、この人と共に生きていると実感し、「私も党」の仲間となります。

初対面のライターに胸襟を開いて話してくださった方々に、改めて感謝するとともに、その貴重なお話から学んだことを、本誌の執筆活動に一層反映させていきたいと思っています。



本誌46号取材時のひとコマ。株式会社特殊衣料 池田啓子会長（左）と筆者

公益財団法人「ノーマライゼーション住宅財団」 の活動をご紹介します

小誌『WITH LIFE』を発行している当財団は平成元年設立、公益に資する法人として、「ノーマライゼーション」の理念に基づき、高齢者や障がい者にとっても安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備・向上を通して、すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与する」ことを【目的】に、主なものとして下記の【事業】を行っています。

- 当財団では、活動理念・趣旨にご賛同いただける方へ、「賛助会員」の入会をお願いしております。
- 当財団へのお問合せは、本号2頁記載の連絡先へお願いいたします。
- 当財団の詳細につきましては、ホームページ (<http://normalize.or.jp/>) をご覧ください。

1 広報誌『WITH LIFE』 『共に生きる』発行

「生涯、快適に暮らしたい」をテーマに、ノーマライゼーションの理念と実践を紹介する当財団の広報誌です。ノーマライゼーションを実践されている方々による具体策、また、関連事例、関連情報源、福祉住宅の実例などの役立つ情報を紹介しています。

■本号通巻50号。バックナンバーを無料提供いたします。



2 助成金により福祉住宅の 建築を支援

高齢者や障がい者にとっても安全で快適に暮らせる住宅、また将来身体機能が低下しても安心して生活できる住宅として新築したりリフォームした建築主、およびグループホームや高齢者向けアパートなどの福祉小規模集合住宅の建築主から応募を受け、審査のうえ今後の参考に資する施工物件に対して助成金を給付し、また特に優れた物件については設計施工業者さんを表彰させていただきます。

■本年度の募集要項（概要）は左記の通りです。詳しくは当財団までお問合せください。

●募集期間 5月1日～11月30日
（締切間近）

●応募方法 当財団ホームページから所定申請書をダウンロードして必要事項記入・提出

●助成金 一件5万円～30万円
（総額300万円範囲内）

3 福祉住宅建築助成 実例集『ふれあい』発行

前項の助成対象物件の中から、さらに選考された事例を、写真や図面つきで紹介しています。専門家のアドバイザー、工夫した点、実際暮らしてみた感想なども綴られています。福祉住宅として新築・リフォームを考えている方などにお役立ていただいております。

■通巻30号。バックナンバーを無料提供いたします。



4 小中学生による 「安全・快適アイデア」コンテスト

お年よりや障がいのある人が安心して

て快適に生活できるための、身近な道具・用具、また安全に外出を楽しめる環境づくりなど、様々な「安全・快適アイデア」を小中学生から絵と文字で提案してもらいます。

■入賞作品 昨年度分は本誌49号掲載、本年度分は次号掲載予定です。

■募集要項 本年度（終了）は左記の通り。来年度も同様予定です。

●募集期間 6月1日～10月31日

●応募規格 画用紙（八つ切り）
当財団ホームページから所定の応募票をダウンロードして必要事項を記入し、作品の裏面に添付

5 福祉事情に関する情報収集 及び提供

国内外各地の福祉施設や福祉事情などを視察し、小誌『WITH LIFE』でレポートを発表し、また「報告集」を発行しています。

■2018年11月実施の「ドイツ高齢者医療・福祉実践現場」視察レポートを本誌49号に掲載。同視察報告集をご希望の方は切手500円分同封の上お申し込みください。





生涯、快適に暮らしたい。